

まえがき

著者	高田 智和
雑誌名	訓点資料の構造化記述 成果報告書
発行年	2013-03-29
シリーズ	国立国語研究所共同研究報告 ; 12-08
URL	http://doi.org/10.15084/00002643

まえがき

「訓点資料の構造化記述」は、国立国語研究所の萌芽・発掘型共同研究として、平成 21 年 10 月から平成 24 年 9 月までの 3 か年にわたって実施した研究課題です。

研究の目的は、訓点資料の基礎研究調査で行われる移点と、第 1 次解読資料である釈文作成について、その工程のデジタル化を検討し、補助ツールを試作することです。いわば、インフラ整備を志向した課題です。

資料研究におけるデジタル化では、原本の画像と、原本のテキストの電子化が求められます。歴史学、仏教学など、人文学の他分野に比べて、日本語史研究では資料の電子化があまり進んでいません。進んでいないというのは、あくまで相対的な話であって、また、資料を電子化すれば無条件で研究の質が向上するわけではありません。しかし、電子化された資料を活用することの利点の多さを否定することはできず、将来にわたって分野としての研究を継承・発展していくためには、取り組むべき課題であると思われます。

このような問題意識から、日本語学・訓点語学・言語学の研究者だけでなく、歴史学や情報工学の研究者、日本の訓点資料研究よりもデジタル化が進んでいる韓国の口訣資料研究者にも参加を仰ぎ、まさに萌芽・発掘的にスタートした共同研究でした。しかし、共同研究発表会を重ねるうちに、分野としての研究の継承の方策を考えることがより重要であるとの認識で合意するに至りました。研究調査工程でのデジタル技術の導入と並んで、研究の継承者を育成するために裾野を広げることも重要だと、再確認したわけです。そこで、平成 24 年 7 月に、富山大学を会場に、大学生向けの NINJAL セミナーを開催しました。

本報告書には、共同研究発表会での報告内容の一部と、NINJAL セミナーの記録を収録しました。本研究課題で確認した、訓点資料研究を継承・発展させるために必要な二つの事柄、デジタル化と教育普及に関する報告を配置しました。諸賢の御批正を乞います。

2013 年 3 月

高田 智和